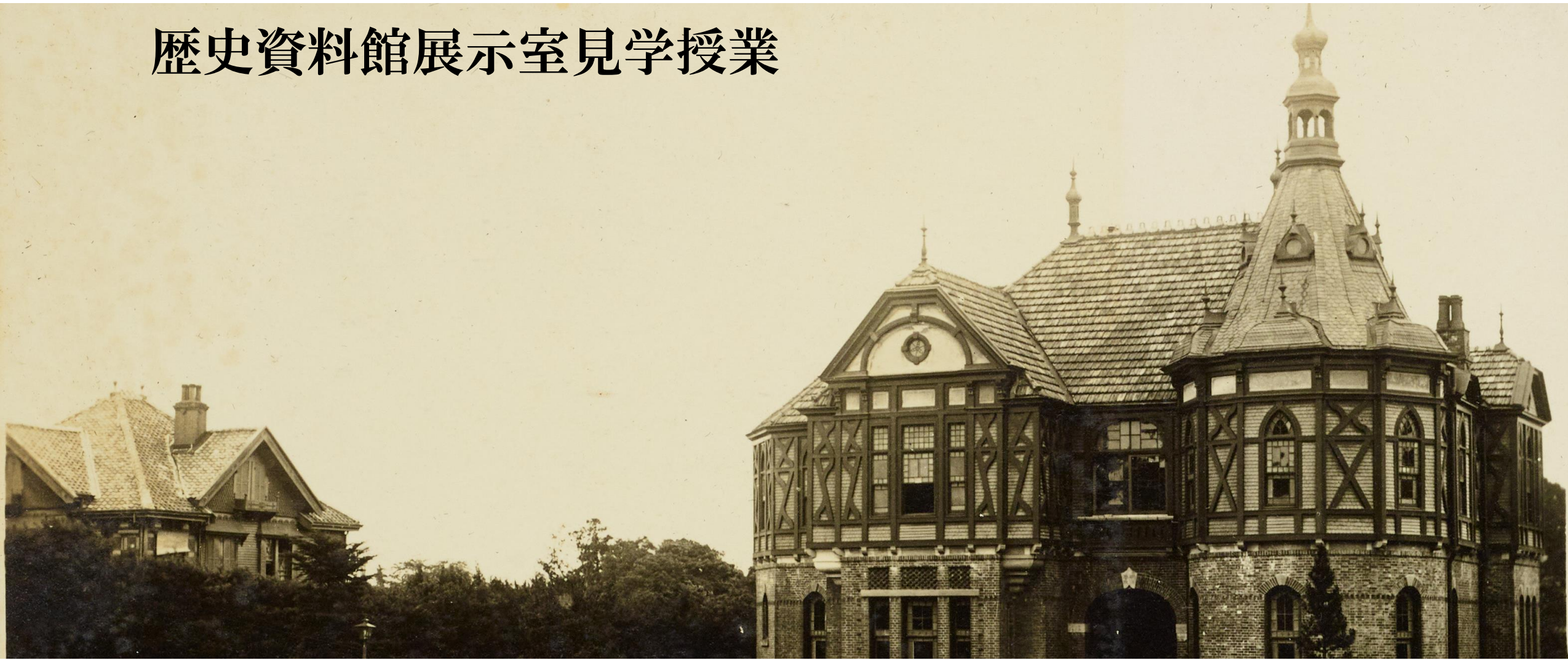


2021年度 視聴覚教育メディア論B

歴史資料館展示室見学授業





明治学院歴史資料館をめぐるって

1. 教育とコミュニケーションの場としての明治学院歴史資料館
2. 来館者との対話の場として
3. 歴史資料館～ミュージアムとしての現状と課題

【このテーマを考えるキーワード】

メディアの情報発信～展示物から何をメッセージとして受取るか～人とモノとのコミュニケーション
～展示をめぐる人との対話～教育プログラム

1.教育とコミュニケーションの場としての明治学院歴史資料館

1) なぜ歴史資料館が必要なのか

明治学院の歴史と組織について説明責任を果たすため。

明治学院歴史資料館に保存している貴重な資料展示を通して多くの人の目に公開・発信し、且つ、教育・研究・調査・公開等に活用することを目的とするため。

歴史資料館規程

第1条 学校法人明治学院（以下「学院」という。）に明治学院歴史資料館（以下「資料館」という。）を置く。

2 資料館は、学院と学院の設置する諸学校の歴史に関する資料およびその種の資料に関する情報（以下「資料」という。）の収集、保管を行い、研究・教育の用に供することを目的とする。



1.教育とコミュニケーションの場としての明治学院歴史資料館

2) 何のために展示をするのだろうか。

展示されているものは、過去のものであるが、観賞するのは現在の我々である。昔の人がどのような思いで「史料」を遺したのか、そして何故その「史料」が展示物に選ばれて展示されているのか。想像力をきちんと使えば、積み重なった知識の上に新たな見方が生まれ、様々な角度から展示をより深く広く知ることができる。

展示室は「知の拠点」



そして、鑑賞者が展示を通じて得た知識や自分の言葉を広く共有することにより、多くの人とコミュニケーションを図ることが可能になる。

1.教育とコミュニケーションの場としての明治学院歴史資料館

3) 守ることの重要性

資料を保護し、文化の保存と研究に役立てる。

■学院史だけでなく、当時の時代背景との関わりを想像することができ、そこから新しい発見や研究が生まれる可能性がある。

■史料を適切に保護し、保存していかなければ、史料の劣化が進み、史料の閲覧もできないようになる。

→手に取れない、ページがめくれない、文字が読めない…

研究が進まくなり、「知の共有」が出来なくなる。

【資料の保護方法】

歴史資料館内では資料保存封筒や、保存容器を活用している。定形外の大きな資料は、採寸したうえで、資料保存に適切なサイズの保存容器作成を業者に依頼している。

資料保護方法の一例



明治学院第2代総理井深梶之助が遺したアルバムを中性紙保存箱に入れて保護している。

2. 来館者との「対話」の場として



歴史資料館展示室という「対話」の場に求められているものは何だろうか。

受講生の皆さんは、この場で、どのような「対話」を生み出しますか？

紙に関する豆知識

酸性紙:9世紀半ばに近代製紙技術が確立し、用紙の大量生産が始まった。その際、使用された硫酸アルミニウムが紙の劣化を引き起こす原因になった。紙にはサイジングというインキのにじみ留めが必要だが、にじみ留め剤に使用される「ロジン（松ヤニ）」の定着に硫酸アルミニウムが使われていた。

中性紙:日本には、酸性紙と中性紙の明確な定義はないが、国立国会図書館によるとpH6.5未満の紙を「酸性紙」とし、pH6.5以上pH10までのアルカリ領域のものを「中性紙」と呼んでいる。酸性紙は劣化しやすく長期の保存に向いていないため、今日では、長期保存のために書籍の多くは中性紙で作られている。

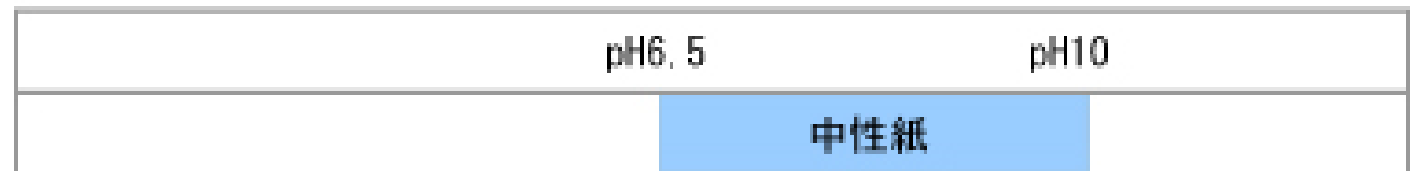


酸性劣化して破損した洋書ページ

■ pH



■ 日本での一般的な中性紙



3.歴史資料館～ミュージアムとしての現状と課題

1) デジタルアーカイブズの構築

2022年2月公開を目指して、歴史資料館のデジタルアーカイブズ構築を進めている。公開されると歴史資料館所蔵資料約10,000点、画像約1,000点がWEB上で公開され、目録検索と画像検索が可能となる。

〔期待される効果〕

■内閣府が推進する「ジャパンサーチ」は、デジタルアーカイブ横断型の統合ポータルサイトで、歴史資料館デジタルアーカイブは、「ジャパンサーチ」にも掲載されるため情報流通に貢献する。

■横浜キャンパスと東村山キャンパスにおいても、Webを利用した所蔵資料の価値の共有と授業等での利用が可能となる。新型コロナウイルス感染拡大により展示室の利用を制限されるなかでもICTを利用した教育・研究活動における非常に有効な手段となると期待される。



トップ画面のイメージ

3.歴史資料館～ミュージアムとしての現状と課題

2)歴史資料館と普及活動

普及活動は明治学院歴史資料館の今後の課題である。

- SNS等の現代的な広報がなされていない。
- 歴史資料館の入り口がどこにあるのか、分かりにくい。
- 現在、学生や一般の来館者に向けたわかりやすい展示内容のガイド等はなく、多言語対応がなされていない。
 - ※一歩前進として、英語版明治学院歴史資料館案内が2020年に発行された。
- バリアフリーの点からみても多くの課題（障がい者への配慮）が残っている。
 - 展示室入口の段差
 - 点字表示
 - 音声ガイド等



記念館前に立てる案内板

開館前に看板を出し、閉館前に看板をしまおう。

3.歴史資料館～ミュージアムとしての現状と課題

3)展示資料の入れ替え（リニューアル）

明治学院の歴史について、どのような展示を企画すると教職員・学生・生徒・一般来館者に関心を持っていただけるか。



受講生の皆さんはどのような展示企画をたてますか？

【現在のリニューアル企画案】明治学院成立にいたる、横浜居留当時の日本と世界の社会的状況（海外宣教の始まり）、宣教師たちの働き（幕末動乱期と宣教師、地の誕生と宣教師）を紹介する。

3.歴史資料館～ミュージアムとしての現状と課題

4)展示室環境

文化財である建造物の1階を改装して展示室として
いるため、**博物館展示室を前提として設置された環境
ではない。**→室内温度、湿度等を管理する設備がない。

- 無人展示室と展示環境上の問題から複製物展示とパ
ネル展示が中心となっている。
- 一部資料について現物資料展示に踏み切っているが、
湿度・温度管理が適切でないため、現物資料への影
響が懸念される。

■求められる展示環境

〔東京国立博物館〕

年間を通じた温度は20～24℃に設定し、相対湿度につい
ては50～60%とし、展示室内で一日に生じる変動幅(日較差)
はそれぞれ3℃以下、5%以下、展示ケース内部は3℃以下、
2%以下と規定している。



へボン博士遺愛のゴブレット
純銀製であるが、変色が著しい。

明治24年卒業写真展示に見る、複製と原資料の相違

島崎藤村展示コーナーの複製写真



歴史資料館所蔵の原資料写真



複製は原資料をどこをどのように改変しているのでしょうか？
受講生の皆さんは、複製を作成することになったら、どのような工夫をしますか？

3.歴史資料館～ミュージアムとしての現状と課題

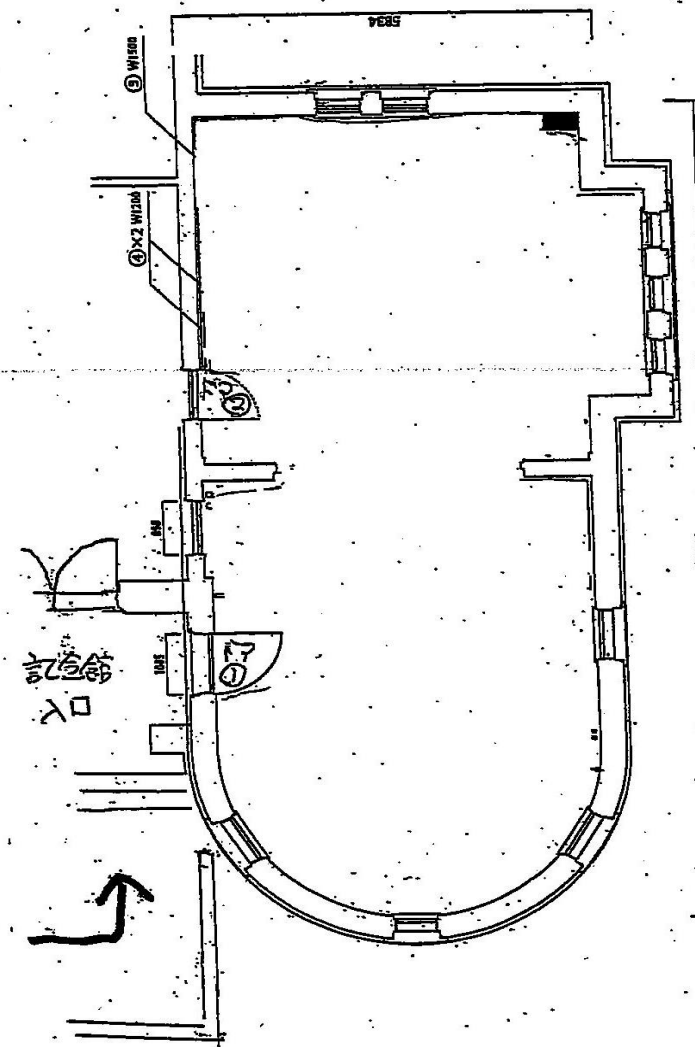
展示室の現況2-1

<制約条件>

- ・文化財で釘一本打てない
- ・他の部屋との雰囲気調和必要
- ・向いはチャペルで静粛必要
- ・他室建学との連動あり
- ・入室導線の困難(入口・出口)
- ・室内色はこげ茶と白
- ・窓は高窓で光線が全方向から大量に入る。
- ・バックヤード全くなし
- ・企画展と常設展の併存
- ・将来の展示室拡張性も
- ・夜間展示はほぼない
- ・無人運用必要・セキュリティ
- ・企画展の最大頻度 年2回×4学年=8回が単位
- ・企画展の展示品の分量が問題(軽く)
- ・予算不足で既存家具を最大限理用
- ・企画展と常設展との分量調整が必要。

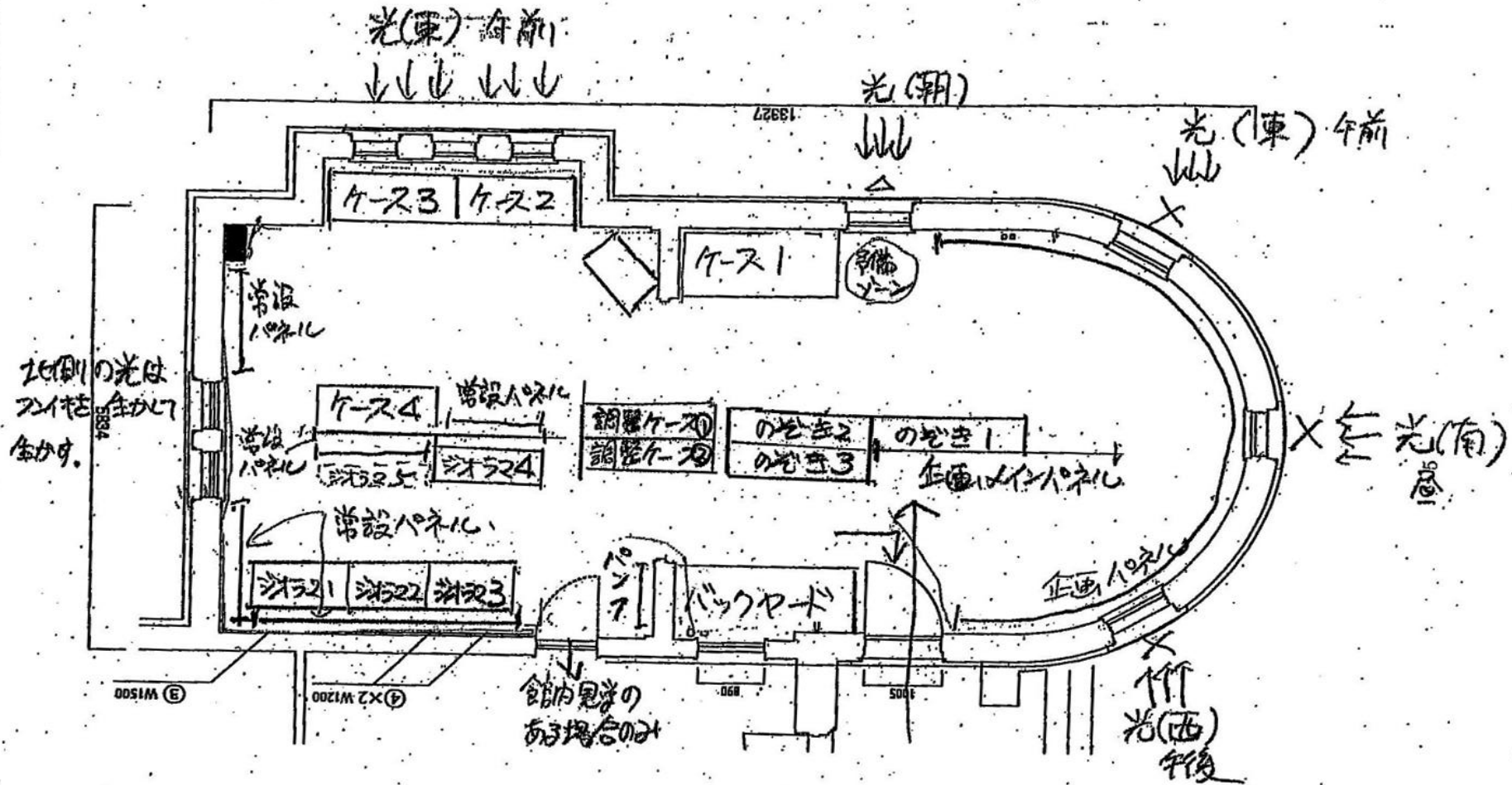
<概念的に何があるのか=何が展示できるか>

- ・設立: ミッションスクール (非特定教派)
日本で一番古いキリスト教の学校
- ・学問: 英学-教養教育のカレッジ
- ・文化: キリスト教教育(プロテスタント)と文化
ただし、神学部は東京神学大学独立
- ・社会事業に大きな歴史と人づくりを持つ



3. 歴史資料館～ミュージアムとしての現状と課題

展示室の現況2-2



3.歴史資料館～ミュージアムとしての現状と課題

コロナ感染症流行下での歴史資料館対応

コロナ感染症流行下での展示室での感染防止対策と資料保護の両立をどのように図るか。

例] 換気の観点から展示室出入口ドアを開放し、あわせて展示室内の扉(記念館内側)も同様にして、空気の対流を図ることが望ましい。しかし、展示室で入口ドアを開放しておくこと、陽射しの入り込み、害虫の侵入・細かい粉塵の侵入が想定され、展示室内環境には好ましい状況ではない。



歴史資料館展示室見学ガイド

■ 「ガラス乾板に見る明治学院の歴史 明治学院歴史資料館所蔵 ガラス乾板の 世界」

歴史博物館はガラス乾板を40枚ほど所蔵しており、2020・2021年の2年において、画像をデジタル化しました。今回の展示では、所蔵するガラス乾板の画像を用い、学院の歴史をたどります。

(注目)

□ガラス乾板の画像のシャープさ鮮明さ

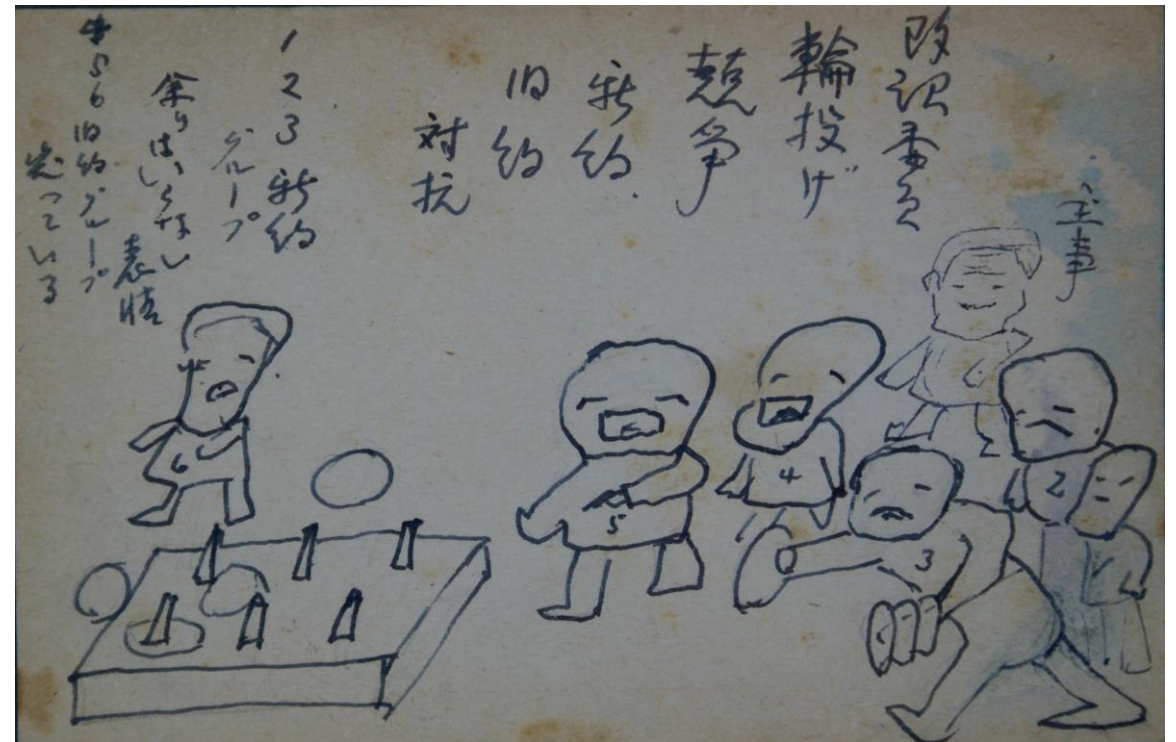


■都留仙次関係資料展示

ガラス乾板に画像の残る明治学院
第6代学院長都留仙次についての資料
を展示しています。

(注目)

- 都留仙次の私信 妻芳宛、ご子息
和夫宛→夫、父としての都留仙次
- 関東大震災時に都留仙次が朝鮮人
学生を匿った出来事(エピソード)に
関わる記事



1952年8月30日 都留仙次が和夫氏に宛てた葉書
この時、仙次は聖書改訳委員として御殿場の二ノ岡
荘に滞在していた。日々の出来事を絵手紙にして
送っている。

■屋我良明氏寄贈資料

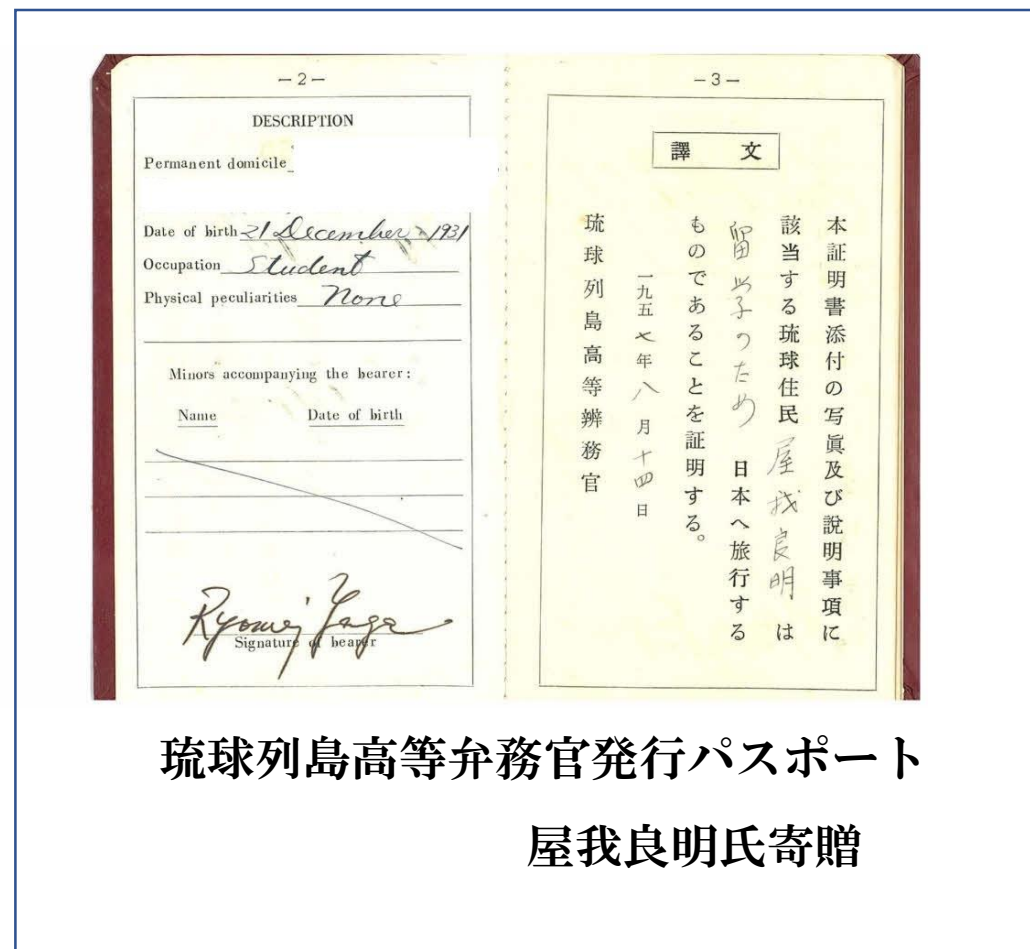
1954年、いまだ米軍統治下にあった沖縄から本学に留学した屋我氏より寄贈された、留学手続き関係資料と履修要項等学生生活関係資料を展示しています。

(注目)

- 1950年代米国統治下の沖縄:パスポート
日本留学生証明書
- 1950年代の学生生活:講義要項、証明書・履修届等手書きの書類

個人のライフヒストリーとしての史料

次につなげる可能性として、ライフストーリー・インタビューにより資料を掘り下げる。



■博物館実習成果展

Working Heritage

—愛され続ける歴史的建造物3棟—

9月6日(月)～10日(金)にかけて1日6時間延べ30時間にわたり、文学部芸術学科博物館学芸員課程の館園実習(学外実習)が歴史資料館で実施されました。実習に参加した学生3名は歴史的建造物3棟を取り上げて文化財であることの意義、建造物としての魅力を発信する展示としてまとめました。

(注目)

□受講生がどのようなところに関心をもったのか。



- ヘボン、島崎藤村、賀川豊彦コーナー
人物紹介パネルと資料展示(一部原物展示)
- 井深梶之助人物紹介パネル
- 4つの時代のジオラマ (1890年頃、1950年頃、1985年頃、2008年頃)



(注目) キャンパス風景がどのように変遷してきたのか
～失われた建物、残っている建物

私たちは何を継承しているか、何を引き継いでいくか